

114
A4638



附郵便一書奉呈侍所右位下守亮
 入彦被遊一事、今遂暫留地内関、
 一同多異、事務多、紫懷、宋、
 敷、陳、列、紙、建、議、之、某、宿、志、有、
 今般長崎縣之人、津江、太郎、者、内務
 卿、呈、上、之、一、覽、也、一、可、核、到、事、
 之、後、一、件、之、奉、儀、新、田、氏、一、族、之、祖、先
 以、兼、宗、家、之、法、也、俱、一、代、之、上、州、新、田
 二、居、任、之、事、者、也、抑、宗、家、新、田、氏、義

天正十一年四月
腰候爵邸寄結



正徳頃旨

明治五年一月

金井之恭再拜

某議大隈公閣下

某議伊藤公閣下

某議井上公閣下

大正十一年一月
大隈侯爵邸藏

楠氏新田氏ヲシテ華族ニ列セラレ度議

臣之恭誠惶誠恐頓首々々伏シテ惟ミルニ明治維新太
政復古ニ百王ノ遺緒ヲ續キ下千載ノ隆典ヲ脩メ霸府
ヲ卻ケテ以テ僭亂ヲ匡シ封建ヲ廢シテ以テ天下ヲ公
ニス功天地ニ侔シク明日月ニ並ブト謂フハ是レ固
ヨリ 天皇陛下乾綱獨斷大號ヲ汗渙シ玉フト列聖在
天ノ靈實ニ其衷ヲ誘キ玉フトノ致ス所ナリト雖モ抑
亦猷謨輔弼ノ佐股肱干城ノ臣忠蓋身ヲ致シ以テ王事
ニ從フノ故ニ因ラスンハアラウス蓋シ聖王ノ功ヲ賞ス
ルヤ啻ニ生者ニ及ホスノミナラス亦死者ニ及ホシ啻
ニ死者ニ及ホスノミナラス亦遠ク古ノ忠臣ニ及ホス
豈ニ獨リ勞ニ報ヒ惠ヲ賜フノミト謂ハンマ世道ヲ維
持シ風教ヲ勸奨スル所以ノ道之ヲ捨テ、後他ニ求ム

ハキ無キナリ臣之恭竊ニ方今ノ功臣ヲ視ルニ朝廷既
ニ爵ヲ頒テ祿ヲ賜ヒ微トシテ録セサルナク細トシテ
之ヲ遺サス其恩ヲ推ス亦遠ク往日ニ及ホシ上ハ南朝
ノ諸忠臣ヨリ下ハ近古布衣草莽ノ士ニ及フマテ苟モ
心ヲ王室ニ存シカフ國家ニ致ス者ハ齊ク褒贈祭祀ノ
盛典ニ與ル徳澤至隆復謂フハキナシ然リ而シテ臣之
恭猶心中倦々言ハシト欲シテ已ム能ハサル者アリ請
フ詳ニ之ヲ言ハシ夫レ忠臣義士何レノ代ニカ之ナカ
ラン然レト古今獨楠氏ヲ推ス抑古ノ忠臣ト稱スル者
慷慨節ヲ致シ死ヲ守リテ道ヲ善クスルノ徒ニ乏シカ
ラスト雖モ或ハ功終ニ一時ヲ救ヒ或ハ勞唯一身ニ止
マル楠氏ノ如キニ至リテハ則チ智以テ國ヲ經スルニ
足リ勇以テ敵ヲ制スルニ足リ彈丸黒子ノ孤城ニ嬰リ

テ補天浴日ノ偉勳ヲ策シ不幸ニシテ南風競ハス身湊
川ニ殞ト雖モ子孫猶能ク其遺訓ヲ奉シ開關崎嶇南
朝ニ藩屏トシ三帝五十餘年ノ久キニ及ヒ宗族漸盡灰
滅ニ至リ而シテ後ニ已ム新田氏ハ稍楠氏ニ遜ルト雖
モ亦能ク終始勤王鞠窮盡力闔門終ニ忠義ノ鬼ト為ル
顧フニ此二氏ハ其精忠大節天地ヲ窮メ萬古ニ亘リ固
ヨリ尋常ノ忠臣ト日ヲ同クシテ語ルハカラス方今佐
命ノ元勳ト雖モ亦其風ヲ聞テ興ルニ非サルハナシ則
チ二氏ノ功萬世臣子ノ綱常ヲ扶植スト云フモ可ナリ
明治ノ太平ヲ致スニ興リテカアリト云フモ可ナリ嗚
呼功アルト此ノ如シ冝ク其報酬ノ衆ニ超エ倫ニ絶シ
子孫赫々トシテ庶民ノ上ニ位スル者アルハシ然ルニ
二氏ノ後新田氏ハ宗族僅ニ民間ニ存シ楠氏ニ至リテ

ハ則チ世間或ハ其苗裔ト稱スル者アリト雖モ多クハ
訛傳ニ出テ未タ正系ノ血統アルヲ見ス豈ニ聖世ノ一
大缺事ニ非スヤ故ニ區々ノ心竊ニ願クハ廣ク天下ニ
告ケ苟モ楠氏ニ因アル者ハ或ハ其譜牒ヲ出サシメ或
ハ其口碑ヲ録セシメノ參互考榷其最モ確據アル者ヲ以
テ定メテ其後ト爲シ然ル後朝廷新田氏ヲ併セテ與ニ
之ヲ華族ニ列シ以テ忠臣ノ後ヲ存セラレントテ若シ
夫レ天下果シテ楠氏ノ子孫ナキカ則チ別紙長崎縣人
建言ノ如ク皇族ノ一子弟ヲ擇ヒ以テ其祀ヲ脩ムルヲ
命セラル、モ亦不可ナシ果シテ然ラハ庶クハ天下景
仰矜式スル所アリテ二氏ノ鬼亦將ニ九原ニ感泣シ聖
恩ノ辱ヲ拜セントス茲ニ謹ンテ廣告文一章ヲ附シ
併セテ進止ヲ俟ス臣之恭誠惶誠恐頓首々々

内閣權大書記官金井之恭

廣告文案

楠氏ノ古今忠臣ノ冠タルヤ固ヨリ論ヲ俟タス曩ニ徳
川氏政權ヲ執ルノ日權中納言源光圀卿墓ヲ湊川ニ建
テ維新以降廟號ヲ賜ヒ祀典ヲ修メ朝廷追賞ノ義至
レリ是ニ於テ天下有志ノ士感泣奮勵皆齊ク王事ニ從
ハントヲ思フ然ルニ茲ニ一缺事アリ即チ此ノ如キノ
忠臣ニシテ其子孫ノ世ニ顯ハル者ナキ是ナリ小子
嘗テ之ヲ慨スルト久シ今聖代ニ遭遇シ朝恩ノ萬一
ヲ報セントス以為ク宜ク楠氏ノ後ヲ尋ヌルヲ以テ始
トスヘシト故ニ同志ト相謀リ以テ此舉ニ從ハントス
請フ江湖ノ諸君苟モ楠氏ニ因アル者ハ其譜牒若クハ
口碑ヲ録シテ以テ寄贈セラレヨ然ルルハ小子將ニ比
較考證廣ク識者ニ質シ其最モ確據アル者ヲ裒集シ以

朝廷ノ裁決ヲ仰クヘシ茲ニ謹テ此旨ヲ廣告ス

東京下六番町四十七番地

金井之恭

大正十一年
張侯爵邸

太政更始以來古今勤王忠節ノ士ヲ網羅甄録シテ悉ク
追祭贈賞ヲ賜フ王民タルモノ誰カ感興奮勵セザルモ
ノアラニヤ其古ヨリ勤王ノ士ト稱スルモノ頗ル多シ
然レモ楠父子ノ純忠粹誠ナル恐クハ其古ニ出ツルモ
ノナシ苟モ歴史ヲ講スルモノ讀テ楠家ノ傳ニ至レハ
仰慕ノ情ヲ動サバハナシ
後醍醐天皇ノ時正成等勤王ノ大節ヲ竭セモ尚勢運ノ
止ヲ得ザレニ因テ兵政遂ニ武門ノ手ニ歸ス明治元年
泰クモ
聖上振古ノ英猷ヲ以テ數百年來盤根錯節ノ霸政ヲ削
平シ王道始テ古ニ復セリ故ニ歴々トシテ封建ニ素餐
スルモノ翕然トシテ王化ニ風靡ス然レモ此際ニ當テ
ヤ忠義激昂ノ士之ヲ翼賛スルニ非ザレハ事亦容易ニ

大正十一年
張侯爵邸

非ス其補佐ノ功臣タルモノ曾テ楠氏ノ餘風ヲ仰企シ
其肝膽ヲ薰陶スル所應ニ輕々ナラザルベシ然レハ
楠氏忠切豈啻當時ノミナラニヤ數百年ノ後ニ至テモ
凜乎トシテ泯ニザルナリ楠氏モ亦明治ノ聖代ニ遭遇
シ追贈ト云ヒ社廟ト云ヒ今日ニ至テ始テ顯昭セリ然
リ而シテ只遺憾トスル所ハ斯ノ如キノ名臣ニシテ今
世ニ至リ其遺姓ノ著稱スルモノナシ曾テ民間ニ流説
スル所某ハ楠氏ノ後裔ナリ某ハ楠氏ノ遺胤ナリト然
レモ其血統昭然トシテ楠氏ノ正系ト稱スルモノナシ
是ノ一欠事ト謂ガレテ得ニヤ若シ朝廷廣ク之ヲ搜
リ其系統ナルモノヲ求メ特旨之ヲ華族ニ列シテ其祖
祭ヲ得セシメバ楠父子ノ泉下ニ感泣スルハ論ナク維
新ノ功臣ト其顕榮ヲ齊シ王氏ヲシテ愈感興奮勵ノ心

ヲ勤クサシムルニ至ラン若シ其系統ノ正シキモノナ
クニバ或ハ皇族家ノ一子弟ヲ以テ楠家ヲ再興スルモ
當サニ然ルベキモノト云ハニ乎只楠氏ノ如キハ古今
無比ノ忠臣ニシテ今日其祖祭ノ餘慶ナキヲ慙ミ謹テ
愚衷ヲ書シ大覽ヲ冒瀆ス恐惶頓首

長崎縣士族

明治十三年十一月

津江左太郎

住所東京府下谷區
二長町四十四番地

内務卿松方正義殿

